

会 告

二〇一六年度史学研究会総会および大会は、予定通り一月二日(水)午後一時より、京都大学時計台記念館国際交流ホールⅠ・Ⅱにて開催されました。

総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会、および総会では、二〇一六年度会務報告が行われ、承認されました。

大会は、「歴史研究の過去・現在・未来——『史林』第一〇〇巻刊行に よせて」との共通論題を掲げ、左記のよ うに四名の講師による報告およびそれ に引き続きパネル討論という形式で行 われ、一六〇名以上の来場者を得て盛 会裡に終了いたしました。

基調講演：『史林』と京大東洋史学

礪波 護氏

報告：「回顧と提言」

紀平英作氏

金田章裕氏

上原真人氏

パネル討論

パネリスト

礪波 護氏、紀平英作氏、

金田章裕氏、上原真人氏

討論司会

永井 和氏

二〇一六年度史学研究会大会

・公開シンポジウムの記録

『史林』各巻第一号は、前年の史学研究 大会の報告要旨を掲載することを通例と している。しかし、二〇一六年度の大会は、 本年『史林』が第一〇〇巻を刊行すること を記念する催しとして、「歴史研究の過 去・現在・未来——『史林』第一〇〇巻刊 行によせて」との共通論題を掲げ、四名の 講師による報告およびそれに引き続きパネ ル討論という特別な形態を取った。報告を 行った四名の講師には、大会での報告に関

連する論考の執筆を依頼しており、これら の論考は本誌第一〇一卷第一号(二〇一八 年一月刊行予定)に掲載する予定である。

以上のような理由から、本号では、大会の 報告要旨に代えて、大会後半のパネル討論 の記録を掲載することとした。

以下のパネル討論の記録は、広報担当常 務理事(金澤周作)が作成した原案をもと に、常務理事会が討論の音声記録によって 内容を確認し、加筆修正する形で作成した ものである。

二〇一六年度

史学研究会大会・公開シンポジウム

「歴史研究の過去・現在・未来

——『史林』第一〇〇巻

刊行によせて」——

パネル討論の記録

金澤 周作

パネリスト

礪波 護氏

紀平英作氏

金田章裕氏

上原真人氏

討論司会

永井 和氏

この小文は、二〇一六年一月二日（水）に開催された史学研究会大会の公開シンポジウム「歴史研究の過去・現在・未来——『史林』第一〇〇巻刊行によせて」の最後になされた、報告者四人によるパネル討論の記録である。

まず司会の永井氏が、パネル討論においては、これからどうすべきといった未来型の提言を目指すというよりも、『史林』の来歴を振り返ることを通じて、考察のための参照点を提供することを目指す、との抱負を述べた上で、四人の報告の論点を抽出していった。

礪波氏の基調報告は、京大東洋史を中心に、日本史・西洋史・考古学研究室の歴史とからめて、『史林』の創刊から一九五〇年ごろまでの推移を詳述するものであった。とりわけ、戦後の混乱を脱却するきつかけとして、一九四九年に藤枝晃（一九一—一九九八年）…当時は京都大学人文科学研究所助教授、六八〜七五年に同教授／東洋史の主導で発足した「世界史研究会」と

いう集いの存在に光をあてたこと、また、刊行の滞っていた『史林』が一九五〇年の第三巻をもって、現在まで続く年六冊刊行体制を整えるとともに、比較に基づく世界的考察の意義、すなわち総合的学問としての歴史学の理念を世に広く訴えた画期性を指摘されたことは、聴衆にとつて新鮮かつ大きな驚きであった。永井氏はここから次のような論点を引き出した。すなわち、たしかに、第三三巻には、総合的であらんとする『史林』の理念が表明されており、それは現在も引き継がれているとみてよいが、はたしてこの理念に応じた編集内容が現実にとれているであろうか。もし理念と現実の間に「距離」があるとすればそれはなぜか。またどのようにして解消すればよいのか（論点①）。

紀平報告は、二〇世紀初頭に既存の歴史学のありかたへの不満から、アメリカ合衆国で台頭したニュー・ヒストリーを（同時期の西ヨーロッパに台頭したアナルなどの新しい歴史学の思潮とも関連づけて）論じた。ニュー・ヒストリーの担い手たちが唱導した、自己満足的な現状追認ではなく、現状の客観視、相対化のための歴史学、換

言すれば、長期的視野を持ち、全体をとらえる歴史学という強い意思は、同じ二〇世紀初頭（一九一六年）に生まれた『史林』の二〇〇年にも通底していることを指摘する、刺激的な内容であった。とはいえ、と永井氏は続ける。二〇世紀初頭に始まったニュー・ヒストリーは、一九六〇年代にはもはや「ニュー」ではなく、歴史学に関する基本的認識になったといつてよく、もしそうだとするならば、これを現在、いかにして乗り越えて二一世紀の歴史学を構想すべきなのか（論点②）。

金田報告は歴史地理学とからめて『史林』を位置づけ、その本質的な特徴を「学際誌」であると示した。だが一方で、文系理系を問わず基礎研究軽視の傾向が諸学問への資金配分の方針にも反映されている現状では、『史林』が大切にすべき、時間をかけて「熟成」させた研究成果の掲載という理念はないがしろにされかねないとの危惧も表明した。だとするならば、我々はどうしてゆくべきなのか、と永井氏は問う（論点③）。

上原報告は、考古学にとつての『史林』の役割の変遷を詳細に再検討し、創刊以降

戦前期には考古学の「広告塔」として、戦後から一九五〇年代にかけては発掘調査報告の貴重な場として、そして現在は研究者の「登竜門」として機能していることを明らかにした。永井氏は、この登竜門としての位置づけが、四報告中『史林』の現在についての唯一の直接的な論評であったと指摘した。また、上原報告は、『史林』の草創期から理系の研究者の寄稿をはじめ、文理融合の実績のある考古学が、これからも学際誌としての『史林』に大きく貢献する可能性を秘めているとした。

以下では、その後なされた議論を、多少順序を入れ替えて、整理しておきたい。論点①の『史林』の理念と現実に関して、紀平氏は、一九四八年の『史林』に掲載された「最近国史学界の動向」(後述)において示された理念を高く評価しつつも、日本の歴史学は二〇世紀後半以降も依然として一部にガラパゴスの状況があり、ナショナルな問題意識に引きずられる面がみられ、そのことが今日の歴史認識問題にもつながっていることと述べ、理念と現実の間にある種のズレがあることを指摘した。金田氏は、『史林』の学際誌としての価値は、多分野

からの投稿論文を、じっくり時間をかけて合議審査する編集会議のありかたに体现されているとし、理念が貫徹している点を強調した。また、上原氏も理念と現実は無難していないとの見解を示した。これに対し、永井氏は、たしかに、学際的な研究発表のメディアとして存在しているという意味で理念は充足されているとしてよからうが、個別の論文のレベルではたしてそういえるだろうか、と、留保を付した。

論点②の二一世紀の歴史学のゆくえについては、永井氏が冒頭で断っていたように、未来への提言よりも考察のポイントの提示に重きをおく今回の企画の性格上、踏み込んだ発言はあまりなされなかったが、紀平氏は、いまなお「ニュー・ヒストリー」を奉じて留まるわけにもいかず、「ニュー・ニュー・ヒストリー」が構想されてよいのではと述べ、金田氏は、現今のメディアの多様化状況をふまえて学会誌の今後を考えてゆかねばならないのではないかと指摘した。

論点③の人文学への逆風問題については、上原氏が考古学の観点から、専門的な研究が地域の生活向上に結び付く事例もあった

ことに注意を促し、これからもこのような専門的な研究が将来にわたって役に立ち得る可能性があるのではと指摘した。その上で、役に立つか否かを新たに考えるよりも、これまでの実績を踏まえた地道な積み重ねが大切であると述べた。金田氏は、現今の「政治・行政・社会的要請」に対して、何らかの対応を考えなくてはならないとしても、意義のある研究には時間がかかることは言うまでもなく、「熟成」された論文を掲載し続ける必要性を訴えた。紀平氏は、時流に迎合してすぐに役立つ歴史学を目指す必要は全くなく、むしろ、不利な環境にあっても、「人間の文化的行為」たる歴史学の理念に殉じる覚悟をもつべきだと主張した。そして、『史林』の学際性をこそ、守ってゆくべきであると示した。

当初に示された三つの論点を越えて、討論では、他にも非常に興味深い応答がなされた。たとえば、紀平氏は、『史林』が創刊以来年四冊体制であったものが、戦後の混乱で一九四六・四七年には合わせて三冊(第三二巻)、四八・四九年に各一冊(あわせて第三三巻)しか刊行できなかったことを示し、礪波氏によつて指摘された一九

五〇年の第三三卷の画期性を承認した。しかし、氏は一九四八年の『史林』に「最近国史学界の動向」と題する意欲的で熱気に満ちたコーナーがあらわれたことが、「立ち直りを示す第一歩」と位置付けられるのではないかと述べた。これに応じて、礪波氏は、一九五〇年の第三三卷二号に「『史林』の新発足にあたって」と題した、会員をこえて広い層へ働きかけようとするピラが挟み込まれていたことを実物をもって示し、やはり画期は第三三卷であろうとした。

また、過去一〇年にわたって続けられてきた『史林』の特集号企画への評価も議論になった。上原氏と金田氏は、日本史・東洋史・西南アジア史・西洋史・考古学・地理学という異なるディシプリンが、共通テーマにどのように切り込むのかを知るためにたいへん有益な企画であると述べた。永井氏は、狭い視野を乗り越えるヒントを与えてくれることを評価し、紀平氏は、毎年共通テーマを設定する苦心に思いを致し、そうして示されるテーマそのものが、学際誌たる『史林』の見識なのだとした。さらに、今回はからずも複数の報告から浮かび上がってきた戦後数年間の『史林』にもみ

られた「世界史」への熱い思いが、長い潜行ののち、近年再び盛り上がりへの機運を見せてきたことを踏まえ、「新しい世界史」もテーマになりうると提案した。礪波氏は、ジャック・ルリゴフ（一九二四～二〇一四年・アナール派第三世代の代表的歴史家／ヨーロッパ中世史）の遺著『時代区分は本当に必要か？』を引き合いに出し、こうした、否定的な形式のテーマもありえるだろうと指摘した。

当日会場を埋めた一六〇名以上の聴衆の中からいくつかの意見が寄せられた。歴史学には現状を批判する機能が備わっているにもかかわらず、その存在意義が現在きわめて過小に評価されている理由は、歴史学界が閉じた内輪のみで議論をしていることにあるのだから、外に開かれた発信を模索すべきではないかというもの、また、『史林』の学際性といっても、人文学の範囲内のことなのではないか。社会科学などへも関りの輪を広げてゆくべきではないかというもの。これらについては、永井氏と上原氏により、すでに文学部系以外の分野からの寄稿者がいるので、必ずしも閉じてはいないのではないかという回答がなされ

た。

最後に発言を求められた報告者四人は、多くの聴衆を前に『史林』の来し方について議論できたことを深く謝すとともに、『史林』一〇〇年を振り返って得られた知見から、今後も、おれずに刊行が続けられねばならないという思いを表明した。

パネル討論からは、『史林』とその担い手たちの工夫と苦闘への敬意と、そこに自らも関わってきたことへの矜持とがにじみ出ているかのようであった。『史林』の第一〇〇巻を記念するにふさわしい、熱気に満ちた議論であった。

二〇一六年度

史学研究会総会・大会の記録

二〇一六年度史学研究会総会および大会は、一月二日（水）午後一時より午後五時十五分まで、京都大学時計台記念館国際交流ホールⅠ・Ⅱにて開催された。

総会では、井谷鋼造理事長による挨拶の後、北村昌史氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告があった。

庶務（小野沢透常務理事）からは、役員交代および会員数の動向についての報告